倫風宏話

老幹に新枝を

上廣榮治

月日がたつのは早いものです。そのようななかで本誌も通巻六〇〇号を数えるようになりました。そして、わが会が五十五周年を迎える日も近づいてまいりました。そうした節目に思いを致すたびに、私はしばしば「老幹新枝」という言葉を思うようになりました。

「老幹新枝」とは、亭々として高く聳える大樹の太やかな幹に、また新しい枝が伸びていくさまです。焦土に芽生えたわが会は、永遠に変わることなき人倫の大地に、深く確かに根を張り、幹を太く高く成長させ、枝を力強く四方に伸ばして葉を繁らせ、周囲に人々が憩う爽やかな木陰をつくってきました。

しかし、実践すでに五十有余年、わが会はただただ速やかに成長し、天に向かって伸びることだけを思えばよい段階を過ぎました。その幹が太く確かなものとなった分、急速な成長は難しくなってもいます。それだけではないかもしれません。もしかすると、その機能を老化させ、あちこちに疲労や停滞を生じさせているかもしれないのです。もし、その幹の老化が甚だしくなり、根と葉末の連絡に齟齬を生

じるようになれば、遠からず根は腐り、枝葉は枯れ、幹もまたその生命を終わることになるのです。

ここで言う「根」とは倫理のことです。「幹」とはわが会の組織です。そして「枝葉」とは皆さん一人一人であり、「新しい枝葉」とは、新しい仲間の方々です。幹であるわが会は「倫理」という樹液（生きる力）を根から吸い上げて、枝葉に運ぶ役目をします。また、みなさんの日々の実践精進によって上がった実（養分）は、幹を通じて根にもたらされ、より深く大地の倫理に根を伸ばし、より一層の「生きる力」を吸い上げて、再び枝葉へと送られるのです。

根（倫理）、幹（組織）、枝葉（実践者）。根からは「生きる力」が枝葉へ、枝葉からは「実践の成果」が根へ、幹を通じて双方向に行き交うのです。それが順調に行き交うかぎり、根から吸い上げられる「生きる力」はますます大きなものとなり、それによって枝葉は、次々と新しい枝を伸ばし、豊かに葉を繁らせていくに違いありません。

しかし、その流れに齟齬が生じた場合、吸い上げられた「生きる力」が葉末に届くことが少なくなり、新しい枝葉を生じることはおろか、すでに繁っている枝葉をも枯らしてしまうことになるのです。

五十五周年の節目を思うにつけ、私の脳裏に「老幹新枝」という言葉がかすめるのは、私たちは、これからも新枝を伸ばすに足るだけの生命力を保っていられるかどうかと案じられるからなのです。

わが会の使命はあまりにも明らかです。日本中が、そしてすべての人類が倫理によって生き、仕合わせを実現できる。そんな社会が実現するまで、私たちの実践精進は続けられなくてはならないのです。そのためには、常にわが会のあり方を見直し、より一層の活性化のための方策を探り、実践していくことが不可欠なのです。

長野県の下伊那地方は干し柿の生産が盛んな土地です。昔から、この地特有の急な斜面に柿の木を植

え、大切に育てて実を採りました。採った実は、女衆が集まって皮を剝き、剝いた柿の実を秋から冬にかけての厳しい朔風に晒してきました。春に先がけて「柿打ち」という行事もありました。斧で柿の木の幹を打ちながら、「なるかならぬか、ならねば切るぞ」と柿の木を脅しながら傷つけるのです。

幹に傷をつけると実の収量が増えることは、科学的にも立証できるといいます。幹に傷が入ると、危機を感じた木が、何とかして子孫を残し生命を次の世代に繋ごうとして、必死でたくさんの種を作り、地に蒔こうとするのだそうです。園芸をする人ならご存じでしょうが、常に根切りや根分け、植え替え、剪定などの刺激を与えてやらないと、植物の生育に停滞が生じるのと同じことです。

人間の組織も同じです。近年、社会に連続して起こっている不祥事は、いずれも現状に慣れきって、反省を忘れ、新しい刺激を拒否し続けてきたがための腐敗と老化に由来しています。かつて、すべての組織や企業が敗戦という大きな刺激によって危急存亡の切所に置かれ、必死で生き抜き、そして逞しく成長してきました。しかし、五十有余年を経た今、それらのうちで、いつの間にか自らの成功に安住し、やがて活力を失って老化し、腐敗し空洞化してしまった事例は少なくありません。

わが会とて例外であるはずはない、と私は思っております。わが会であっても、停滞はただちに老化につながるのです。年々歳々、新たな目標と新たな刺激が加えられ、脱皮し若返り、成長し続けていかなければならないのです。もし今、ただいたずらに五十五年間の善き日々を追想し、成功に酔い、今に安住することの嬉しさを祝うために記念式典を催すなら、わが会の将来は甚だ危ういと言わざるを得ないでありましょう。

では、この幹の老化、老幹の憂いは如何にしたら取り除くことができるのでしょう。情報通信技術が極度に発達した現在、これを取り入れることによって意思の疎通を緊密にし、組織の風通しをよくして

活性化をはかるという方法もあるでしょう。あるいはまた、それを拒否し、それに負けぬだけの正確さで素早い対応をすべく努力し、変革を恐れず、しかも善意という人間だけが持つ能力を十二分に発揮して、組織に真の愛和を実現できれば、老幹はやすやすと脱皮して、若返ることができるはずです。

むしろ問題は、新しい枝葉をいかに伸ばすか、どのように生い育てることができるのかという一事です。それは、枝葉がどれほど強く「生きる力」としての倫理を望んでいるかにかかっています。もし、枝葉が望まなければ、これを強制することはできません。枝葉に倫理を吸い上げる意志と力がないかぎり、それは伸び繁ることはないのです。

水面に筒棒を差し込んで、それを口にくわえているさまを想像してください。水中に入っている部分が根、口が枝葉、筒棒が幹です。水は吸う力に応じて口にもたらされます。吸わなければ筒棒は何の働きもしませんし、口に水が至ることもありません。

そうです。枝葉である私たち一人一人が倫理を欲し、それを力強く実践し、仕合わせを実現する。そのことこそが大切なのです。幹を老化させるもさせぬも、私たち一人一人の実践にかかっているのです。枝葉から「生きる力」を求める意欲が薄れていけば、やがて幹の活動も不活発になり、老い、朽ち果てていくでしょう。葉の一枚一枚、小枝の一本一本が「生きる力」を欲し、その力を貫って仕合わせを実現していくなら、幹も活発に倫理を吸い上げ枝葉に手渡し、枝葉の実践の実を根に送り返して止むことがありません。こうして幹は常に若々しく蘇り続けることになるでしょう。老幹が若返り続ければ、たちまち新枝も芽をふき、大きな枝へと育っていくに違いないのです。

五十五周年。それは私たち一人一人の実践によって老幹を活性化し、大きく新枝を伸ばすことを誓い合う日になるのではないか。少なくとも私はそう希望して、日々の実践精進に邁進したいと思います。